

中間報告「甲南リベラリズムの源流を求めて——平生鈞三郎の建学精神と地域開発」

中島俊郎（文学部）

甲南大学の創立 100 周年を前にして建学精神に立ち返り、精神的な支柱である甲南リベラリズムを「郊外開発と文化活動」という視座から検証しようとするのが当該の研究対象である。こうした検証作業は、新たに甲南大学の姿を捉え直し、今日的な意義を問い、本学のさらなる未来への展望につながるものであろう。そこで建学揺籃期の教育的な模索が大正デモクラシーのエトスのなかでいかなる変容を見せて、展開していくかを具体的に跡づけてみたい。こうした検討をえて明確な姿を示すことは、本学の建学精神と教育精神を再検討することにつながっていくであろうと信じる。

だが、建学の精神を豊かに実際に示す文化的な形跡をたどるのはきわめて至難な作業となる。というのも文化的な形象は、時間の経過とともに痕跡を例外なくとどめないからである。簡単な記録ぐらいしか残されていないので、精神性を再建するには相当な労力と資料が必要とされる。そこで郊外開発とともに育まれた甲南リベラリズムの一端をになう文化活動として、今日も活動を続けている甲南大学の山岳部に焦点を当ててみたい。

大正 12 年に旧制甲南高校のなかで発足した遠足部が発展し、山岳部の設立となったのは大正 14 年のことであった。このクラブが研究対象になりうるのは、初期の活動がきわめて大正デモクラシーの精神性を濃厚に示しているからである。クラブ活動の実態を如実に語っている『甲南高等学校山岳部報告』（1927）を見れば、学外から指導者を得て、その助言、指導などから活動を発展、展開させていっていることが理解されてくるのである。

指導者のひとりに藤木九三（1887 - 1970）がいた。藤木は日本登山会にロック・クライミングの技術を伝えた功労者で、その『岩登り術』はわが国最初の指南書であった。また、甲南高校山岳部の設立と同時期である大正 13 年に、藤木は「ロック・クライミング・クラブ」（RCC）を創設し

た。「ロック・クライミングの要諦は、より多く岩に親しむ機会をもつと同時に、正しく岩を理解し、正しく岩を攀じる練習を積むことである」といった一文を藤木は『報告』に寄稿している。このような言葉は、岩場を登攀する技術論以上に「正しく岩を理解」しなければならないとする精神性を汲み取ることができよう。藤木は、甲南高校山岳部に山岳登山という営為が包摂する精神性を感化させていったのである。

歴史的に翻れば、甲南山学部の活動はアルピニズム黎明期とまさしく軌を一にしている。こうした初期活動のなかで 10 代の高校生が積雪登攀を試み、24 もの未踏ルートを走破したのは、堂目すべき快挙であったと言わねばなるまい。また、その活動は個性尊重、アスレティズムの励行を鼓舞する平生鈞三郎の建学精神とも合致しているのは興味深い事実である。ある時期には全校在籍者が 500 名のうち 100 名以上が山岳部に所属して活動していた。そして、大正デモクラシーが昭和初期のファシズムへと転移していく激動の時代に活動の最盛期を迎えていたというのも示唆的ではなからうか。

そこで藤木の思想的な母胎がどのように形成されているかを検討することは、甲南リベ

ラリズムの一端を理解する上できわめて重要な課題となってくる。藤木は新聞記者であったが、多くの著作をものし、深い教養を備えた山岳人であった。ヴィクトリア朝の社会改良家ジョン・ラスキンの『モダン・ペインターズ』を含む膨大な蔵書の大半は兵庫山岳連盟、神戸登山研修所に架蔵されている。貴重な蔵書を活用して、思想の源流をたどり、展開を跡づけることによって、甲南リベラリズムの内実をより克明に照射していきたい。